

鐵道の元勳 井上勝

我國の鐵道の歴史を述べる事よりも、我が井上勝氏の傳を述ぶる事がより大なる興味と刺戟である。

「黒船來り」一種異様な響きが、神州日本の津々浦々に傳はるや、攘夷のさげび、開國の主張は、尊王黨佐幕黨の間に沸騰し、志士の活躍となつて劍戟閃き、忽ち暗闘世界に化し了つた。

幕府の禁制を犯し、町人姿に身をやつし、横濱に入り込んで、窃かに小蒸汽船に乗り、英國商船キロセツキ號の石炭庫に匿れて、亡命した五人の壯漢があつた、この五人中の一人こそ、我が

鐵道神井上勝ではあつたのである。

他の四人はも誰？

井上聞多(後侯爵) 伊藤俊介(後公爵) 山尾庸三(後子爵) 遠藤謹助

五人の一行が横濱をあこに、茫々たる大洋に乗り出したのは、實に文久三年五月であつた
眞紅に燃ゆる夕陽は、血煙あけて
富峰のかけにうすづき。



ロンドンマシソン号のキロセツキ号に乗りし井上勝

分乘して、英氣勃勃、英京倫敦に向ふ。

艤艫遙到歐羅巴 指點看過佛利加

茫々蒼海浪生花 萬里神飛故國家

昨夜南溟今已盡 回頭帆上北辰斜

喜望峰を迂迴して、倫敦に到着したるは、四

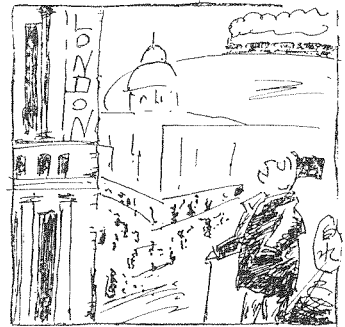
ヶ月許りの後であつた。

さても倫敦に着した五人は、何よりも先きに英語を學ぶここに熱中して、幾許もなく新聞を讀み始めた。

「長藩馬關に於て、外國艦を砲撃し、英艦亦長藩復讐

の議あり」井上聞多伊藤俊介の兩士は、すはやこの記事を發見し

「今日歐洲の富強文明國を敵とし日本の如き時



ロンドンクニイール警く井上勝

代後れの思想や設備を以て戦はんは謀の極である、かゝる暴舉を繰返す時は莫大の償金を課せられ、或は領土を割讓せねばならぬ、もはや傍觀するこはできぬ」他の三人を残し置き、決然として歸國の途に就いたのは翌文久四年三月中旬であつた。

かくて倫敦に残された井上は、留學五年間語學算術理化學鑛山鐵道の學を研究し、別けても鐵道の事は、實地に就き自らシャブルを執りハンマーを揮つて人足工夫となり、レールの据方より建設經營管理に至るまで、深く練習する所あつた。

折から本國は既に王政維新の時機到來したと聞いた彼は、將さに爲す所あらんご、匆匆行李を收め、別れを告げて歸朝したのは、明治元年十一月で、時既に東京へ御遷幸の後であつた。

東北地方並に九州方面頻りに凶荒、米價非

常に騰貴したが、交通の便なきため、北陸の餘剩米を以て、急を救ふことが出来ぬ。

英國公使パークスは、直にこの例を引いて鐵道敷設の急務を、我政府に勧告した。

パークスの斡旋により、ネルソン、レイミ大藏少輔伊藤博文が、會見するこゝになつて、その通譯の任に當つたのが、井上勝、後の鐵道頭で、これぞ彼れが我鐵道に關與した始めてである。

百萬磅起債、工師職工傭入、材料購入等の委託を受けたネルソン、レイは直に歸國して奔走した結果、翌三年春には、工師長モレル其他續々到着した。

そこで東京横濱間十八哩の鐵道建設に、着手するこゝになつたが、何がさて我國前代未聞のこゝであり、朝野舉つて反對し、その建白書數百通にのほつた。

四面楚歌のうちにあつて、大隈伊藤の當局者は更に屈する色なく、太政官に出頭し、得意の辯舌滔々鐵道敷設の急を説いて、廟堂を動かしたが、收支豫算の提出を迫られて、はたご行き詰まつた、そこで取調局の前島密



英國で鐵道工師となつて
仰ぐ 井上勝

立つて指揮監督に熱中し

「俺れより先きに現場へ出た者へは一圓やるぞッ」

こゝは鐵道頭から出た工夫獎勵の布告である。かくて萬難を排し、首尾よく落成したのは、五年九月であつた。

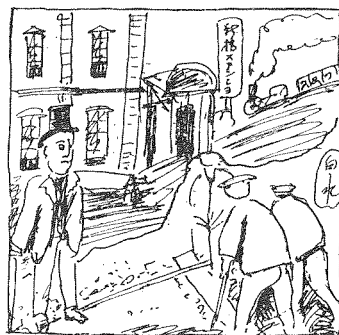
に依頼して豫算書を作製し、漸く敷設決定となつた。

四年の八月鐵道頭に任せられた井上勝は、益々その本領を發揮し自ら現場に

その十二日には開業式舉行され

天皇陛下行幸あらせらる、當日 天皇直衣を召させられ、四頭の馬車に乗御、午前第九字(時)御出門あらせられ、東京府知事代理權參事川勝廣一騎馬にて先導し、皇族太政大臣參議各卿以下皆直衣にて供奉し、陸軍諸兵路上に整列す、新橋鐵道館に於ては國旗を掲揚し山尾工部少輔井上鐵道頭以下奉迎す。

陛下館内に入御、勅任官、各國公使等に謁を賜ひ、鐵道頭は鐵道圖一卷を奉獻す。



新橋横濱間鐵道敷設
と招致する 井上鐵道頭

新橋鐵道館(停車場)は米國人プリンデスの

設計で、伊太利ルネッサンス式木骨石造二階建の建築であつた。

「新橋の南傍、汐留の右岸、寛地瀟灑、廣さ數十歩、園の中央に石室あり、停車場ご云ふ、石を鏤めて柱ごなし、石を磨いて壁ご爲し、精巧美麗、一大石を彫めて以て層樓を爲すに異ならず、樓上は則ち官局、樓下は則ち客室、室も亦二等あり、上等なるものは、席に氈毯を敷いて、發子は美麗なり下等は則ちこれに次ぐ」

こゝはその當時の評である。

次で列車に乗御第十字御發車あらせらる。

第十一字横濱鐵道館へ着御

陛下便殿の御倚子に着させられ、百官衆庶に勅語を賜ふ。

東京横濱間ノ鐵道 朕親ラ開行ス自今此便利ニヨリ貿易愈繁昌庶民益富盛ニ至ランコトヲ望ム。

この盛儀に面目を施した鐵道頭の胸裏いかに。(H生) (つづく)